

令和5年度第1回大阪府総合教育会議

議事録

日 時 令和5年12月25日（月）午後1時00分から午後2時50分まで

場 所 本館2階 第二委員会室

出席者 知事 吉村 洋文

教育長 橋本 正司

教育委員 中井 孝典

教育委員 井上 貴弘

教育委員 竹内 理

教育委員 森口 久子

<八尾市教育委員会 教育長>

浦上 弘明 氏

<大阪府立野崎高等学校 校長>

田中 眞 氏

1. 開会

(司会・野村企画室長)

- ・ただいまから、令和5年度第1回大阪府総合教育会議を開催いたします。
- ・皆様にはお忙しい中、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。
- ・私は進行を務めます、大阪府政策企画部企画室長の野村でございます。よろしくお願いいたします。
- ・本会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4の規定に基づき設置しております。
- ・また、会議は公開で行いますとともに、ペーパーレスで実施いたします。資料はお手元の端末でご確認をお願いします。
- ・それでは、本日のご出席の皆様をご紹介します。吉村大阪府知事でございます。橋本教育長でございます。中井委員でございます。井上委員でございます。竹内委員でございます。森口委員でございます。なお、岡部委員につきましては、ご欠席でございます。
- ・あわせて、本日はゲストスピーカーとして、八尾市教育委員会の浦上教育長、大阪府立野崎高等学校の田中校長にご出席をいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

2. 議事 不登校等の児童生徒に関する今後の取組みについて

(司会・野村企画室長)

- ・それでは、早速議事に移ります。
- ・本日は、「不登校等の児童生徒に関する今後の取組みについて」を議題といたします。
- ・本年10月、国におきまして、令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果が示されました。全国において、不登校児童生徒数やいじめ認知件数が過去最多になるなど、生徒指導上の課題が浮き彫りとなりました。そこでまず、本件に係る大阪府における現状と課題につきまして、資料3により、教育庁から説明をお願いします。

(教育庁)

- ・それでは資料3-1「大阪府における現状と課題」についてご説明いたします。資料の右下にページ数を振っております。
- ・2ページにお進みください。
- ・まず、府内における不登校の状況についてでございます。
- ・不登校とは、年度内に30日以上、病気等の理由以外で欠席している状態のことをいいます。
- ・不登校の児童生徒の千人率はグラフのとおり、それぞれ右肩上がりとなっており、特に小学校では、令和4年度に1校あたり7.3人、中学校では1校あたり28人であり、中学校1クラスあたりにしますと、2.4人在籍している状態でございます。
- ・それでは3ページにお進みください。こちらは公立小・中学生の状況で、グラフの上部、府内小・中学校の不登校児童生徒数を実数で、年度ごとにお示ししております。
- ・コロナ禍以前から増加傾向にありましたが、コロナ禍以降、令和元年度から令和4年度にかけて、小学生は2倍、中学生は1.5倍と、小・中ともに急増しております。なお、全国平均も同様の状況でございます。
- ・続きまして、4ページにお進みください。

- ・左の表は、小・中学校における学年別の不登校者数の推移です。
- ・まず、表の下の方、下部ですね、小学校低学年の層を見ていただきますとわかりますように、これまではあまり見られていなかった低学年で人数が増加しており、不登校となる時期の低年齢化が課題として読み取れます。
- ・この部分に対策を講じないままでは、中学校や高校に進学後も、不登校が継続する可能性があります。
- ・さらに、左の同一集団比を右の新規・継続別のグラフと合わせて見ていただきますと、小学校で不登校となった児童が、中学校進学後も不登校を継続している状況がうかがえ、大きな課題であると認識しております。
- ・また、グラフ等にはお示ししておりませんが、府内では、通信制高校に進学する人数が年々増加している状況があり、その背景の一つとして、中学校段階での不登校生徒数の増加が考えられます。
- ・続きまして5ページにお進みください。
- ・こちらは府立高校の状況です。
- ・右のグラフでは、不登校の生徒の在籍率別学校数を記載しておりますが、在籍率が10%を超える高校が32校あり、府立高校全体の不登校生徒の約半数が集中している状況です。
- ・6ページにお進みください。
- ・左の表では、府立高校の学年別の不登校者数を示しております。
- ・特徴といたしましては、令和3年度に比べると、令和4年度の1年生の不登校者数が急増しております。
- ・右のグラフは、不登校の新規・継続別を学年別で示しておりますが、前年度から継続して不登校になっている割合が、2、3年生が極端に低くなっております。
- ・これは、府立高校を中途退学した生徒のうち、不登校であった者の割合が約4割となっている状況であることから、出席日数等の不足から進級を諦め、中途退学していることも要因の一つとして考えられます。
- ・次の7ページから9ページは、不登校の要因についての調査結果です。
- ・要因については、教員の見立てによる回答と、7ページの小・中学校、8ページの中学校のみではございますが、児童生徒自身による回答の2種類がございます。
- ・教員の見立てでは、7ページから9ページの小・中・高ともに、「無気力・不安」の回答が最も多く、7ページと8ページの小・中学生自身による回答では、不登校になった児童生徒の約4分の1が、「不登校になったきっかけがわからない」との結果でございました。
- ・10ページにお進みください。
- ・不登校の児童生徒が、スクールカウンセラーをはじめとする、専門人材等に相談した割合を示しております。
- ・左側が小・中学生、右側が高校生でございます。
- ・府内では、全国値に比べて相談をしていない割合が高くなっております。
- ・不登校対策では、児童生徒が誰かと話し、考えることが、要因を把握するためにも必要となりますが、教員がその対応をすることはもちろん、スクールカウンセラー等も含めたチーム学校が関わり、要因の分析等、十分なアセスメントがなされない場合は、適切な支援対応に繋ぐことが難しく、大きな課題の一つと認識しております。

- ・次の11ページから12ページでは、不登校の要因の一つである、いじめの状況についてお示ししております。
- ・小・中学生が学校へ行きづらいつ感じ始めたきっかけとして、7ページ、8ページで、児童生徒自身による回答では、約25%がいじめや嫌がらせがきっかけと感じていることや、後ほどご説明いたしますが、いじめ重大事態のうち、いじめの被害を受けた児童生徒が不登校になる傾向が高いという課題があることから、ご紹介をさせていただきます。
- ・まず11ページには、小・中・高のいじめ認知件数の千人率のグラフを示しております。
- ・次の12ページ左側では、いじめの解消率の推移をお示ししております。
- ・右のグラフでは、いじめがきっかけで不登校に繋がっている、いわゆる「2号事案」の件数の推移を示しており、棒グラフの着色部分がそれに該当いたしますが、重大事態の多くが2号事案となっている状況です。
- ・このような状況から、いじめ重大事態のうち、いじめの被害を受けた児童生徒が不登校になる傾向が高いという課題がうかがえます。
- ・続きまして、13ページにお進みください。
- ・府立高校における中途退学の状況です。
- ・先ほどもご説明したとおり、府立高校を中途退学した生徒の約4割は不登校です。
- ・その点も踏まえて、まず左のグラフをご覧くださいと、中途退学者数が令和3年度まで減少傾向であったものが、令和4年度に大幅に増加し、1校当たり11.6人の生徒が中途退学している状況にあり、先ほど5ページでご紹介した、不登校生徒の在籍率が10%を超えている32校では、ほぼ倍の1校当たり21人の生徒が中途退学している状況です。
- ・右上のグラフでは、学年別をお示ししておりますが、各年度、いずれも1年生が最も多くなっております。
- ・右下のグラフをご覧ください。中途退学の主な理由としましては、進路変更が最も多く、学校への聞き取りでは、通信制高校への入学が多いとのことでした。
- ・14ページをご覧ください。
- ・こちらは不登校に至るまでのイメージ図です。不登校は要因が複合的に絡み合っており、また、高校では中途退学につながることもあります。
- ・学校や社会との繋がりや支援が途切れることで、将来、ひきこもりになってしまう可能性もあるため、学校段階での対応が必要でございます。
- ・15ページにお進みください。
- ・大阪府の現在の取組みをまとめております。左側に小・中学校、右側が府立高校でございます。
- ・まず左側の小・中学校での専門人材の配置として、スクールカウンセラーを中学校では、政令市を除く全ての中学校区に週1回配置をしております。
- ・一方、小学校では、中学校に配置したカウンセラーが、小学校でも活動することで対応を行っておりますが、1校当たり年4回程度の対応となっており、中学校の配置とは差が大きくなっております。
- ・また左下の学習支援、居場所支援として、今年度から小・中学校での校内教育支援ルームに校内教育支援員を配置することで、不登校やその兆しのある児童生徒の支援を行っております。

- ・右側の府立高校では、専門人材の配置として、スクールカウンセラーを全校に配置しておりますが、1校当たり年間10回程度の配置となっております。また、生徒への配慮の有無と、生徒自身の情報を引き継ぐため、府立高校では、高校生活支援カードの導入や、下段にありますように、居場所支援として、NPO等の民間団体と連携した居場所を15校に設置し、登校の動機づけなど、学校への定着を図っております。
- ・16ページにお進みください。
- ・不登校の状況から抽出した課題等を改めてまとめております。
- ・上から、「不登校となる時期の低年齢化と、それが継続する傾向がある」、「十分なアセスメントがなければ、適切な支援、対応が困難となる」、「いじめの被害を受けた児童生徒が不登校になる傾向が高いことがうかがえる」、「府立高校では、中途退学は1年生が最も多く、中途退学後の進路は、通信制高校が多い」ことでございます。
- ・次の17ページでは、参考として、国の動きを示しております。
- ・国においても、不登校者数の増加を大きな課題として捉えており、対策として、学びの多様化学校や、校内教育支援センターの設置促進、チーム学校による早期支援を進めることを掲げております。
- ・続きまして、資料3-2「大阪府学校教育審議会部会での議論」について、ご紹介いたします。
- ・19ページをご覧ください。
- ・諮問機関である大阪府学校教育審議会の専門部会において、審議テーマ「多様なニーズに応える学習機会の保障」の中で、不登校経験のある生徒の増加についても審議が行われてまいりました。
- ・資料では、部会報告のうち、府立高校における不登校の生徒への対応について概要を記載しております。
- ・まず上段から、より多様化する生徒・保護者のニーズへの対応として、学びの多様化学校の高校での設置や、チーム学校としてのアセスメントを中核とした支援体制の構築、児童生徒の状況や支援内容を、小・中・高と適切に引き継ぎ、また、高校段階で再アセスメントを行うことが提言されています。
- ・次に中段、不登校の生徒にとって、全日制の課程では、週当たりの標準授業時数が定められており、一般的に、単位認定に当たり、出席状況等の要件があるなど、教育システム上の制約があります。
- ・このことから、通信やオンラインを活用した学びによる単位修得を認め、また、府立の通信制高校がセンター的な機能を果たすなど、機能強化を、国の動きを見据えながら行うことが求められています。
- ・さらに下段のところですが、不登校経験のある生徒をはじめ、多様な背景がある生徒が通学する通信制や夜間定時制の課程については、その志願動向等の変化を踏まえた課程の柔軟化が求められています。
- ・説明は以上です。

(司会・野村企画室長)

- ・それでは、続きまして、学校現場における不登校対策について、八尾市教育委員会、府立野崎高等学校、それぞれの取組みを発表いただきます。まずは、八尾市教育委員会の浦上教育長、よろしくお願いいたします。

(八尾市・浦上教育長)

- ・皆さんこんにちは。八尾市の教育長の浦上でございます。
- ・まず、今日は総合教育会議に呼んでいただき、本当にありがとうございます。
- ・八尾市の実績報告をするのですが、これは、どの市町村でも頑張っておられます。だから、八尾市だけじゃないのです。
- ・私が今日ここでお話しさせてもらいたいのは、不登校というのは本当に難しい問題なのです。だから、実際に自分が、子どもと顔を合わせて、保護者と顔を合わせて、その思いをしっかりと聞きながら、どういう対応をするのが一番いいのかというあたりを、私の実践を踏まえたものを、今日は話させてもらいます。
- ・机上の論理の話は言っても仕方ないことだから、やはり実践しているのが、聞いていただいて、行政としてどうあるべきか、また、学校がどうあるべきかを、今日は15分かけて話させてもらいます。よろしくをお願いします。
- ・まず、私は47年前に、大阪の八尾の中学校の教員として採用されました。
- ・当時、大阪府、八尾市もそうですけども、やはり人権教育を大事にしている。大阪は特に、全国の中でも素晴らしく、人権を大切にしている教育を実践されていました。
- ・そんな中で、私自身もいろんなことを学んで、やはり子どもが一番大事なっちゃうかと。やはり子どもらには、どんな状況に陥っているのかといったときに、一般によく言う、いじめや、不登校や、ヤングケアラーや、児童虐待や、また日本語が喋れない子どもたちにどう教えてあげるねんというあたりを大事にせなあかんのが、大阪府はさすがだと思っています。大阪府、そして各市町村もです。
- ・やはり私は言いましたけども、今それぞれ市町村でいろんな取り組みをしていますけども、果たして、それがいいのかどうか、八尾もそうですけども、いろいろ試行錯誤をしながら、一番いい方法を考えていかなあかと私はいつもでも思っています。
- ・やはり一番大事なのは、子どもの信頼関係をいかに教員が作れるかです。
- ・いじめもそうやけども、不登校につながる要因として、一番情けないのは、先生とうまくいかないことです。それで学校を休んでいる児童生徒がいっぱいいます。
- ・数字でいうと、27%は教員とうまくいっていないと表れていましたけれど、私、教育長として各校長や教員に、八尾の教育は、誰一人取り残さない教育の実現をめざそうやということで指示もさせてもらっています。
- ・もう一つは、2017年に国のほうで教育機会確保法を制定しました。これは不登校がどんどん増えている中で、国としてどうあるべきかを真剣に考えてくれはったと思います。
- ・私も今、去年から2回目の教育長をしています。11年前から教育長をやっている、1回目の時のイメージと、今、全然違うのです、国が。
- ・やはり「学校に行きたくない」、それを無理やり親が「学校に行かなあかんぞ、成績も低くなる、進路もあるやろう」ということで、無理やり学校の方へ親が行かせている時代だった。ところが、教育機会確保法はそうじゃなしに、「あんた、しんどかったら休んでいいよ。休憩しいや。休憩する中で、自分の何か新たな発見、そして明日に向かって生きていく価値を見つけましょう。」そのあたりをしっかりと、明示された法律です。
- ・ただ、それは出席のカウントとか、要するに、学校へ行っていないから出席のカウントになるのか、無理やとか、あるいは評価評定、成績をつけるのが無理だというルールが昔はあったけれども、今は

そうじゃない。結局、学校以外の学びの場に行っていたら、学校長の判断で出席のカウントもしてもらえないし、評価評定もつけてもらえません。

- ・私が教育長に就任する前に、市長に対して「とにかく評価評定、出席扱いさせてください」と提言もさせていただきました。今では、本市は学校長の判断のもと、違う居場所で学んでいる場合等でも出席扱いとなります。
- ・また、実は中河内3市の市長さんや教育長さんらにお会いし、学校外での居場所で学習や他の学びを行った場合、評価や出席のカウントをしてほしいとお願いに上がりました。
- ・だから、大阪はそういう意味でも、やはり最初に言った人権教育を大切にするという部分においても、そうかなというふうに思っています。
- ・今日は、話の中身で、自分が実際にやってきたことの話を見せてもらいます。
- ・この絵本を紹介させてもらいます。
- ・これは、私がNPO法人輝というのを、八尾でスクーリング会場を設置して、NPO法人を立ち上げました。その中で、今、八尾がやっているオンライン、バーチャル空間の中で、子どもの居場所をつくりましょうということで、これも新聞にも掲載されましたけれども、その中で、原点といいますか、不登校を考える上での原点のお話を今日したいのです。
- ・ここに、表紙に「さく（作） みそら びくか」「え（絵） かず」と書いてありますでしょう。これは、みんなそれぞれ名前を付けようと言って、名前を付けさせたのです。本名ではないですけど。
- ・この絵をつくったのが「かず」くんです。彼は香川県の子なのです。オンラインだから、全国、アメリカの子でも入って来られる。この子は、小学校2年生の時に、給食の時間に給食を吐いたのです、教室で。そこから中学3年まで、1回も学校に行っていないのです。私と出会ったのが、オンラインで、中学2年生のときです。
- ・「顔出しできません。顔を見せられません。僕は無理です。」最初に言っていた。その子は、最初はチャットから始めて、チャットで会話をした。
- ・最後にこれを作って完成したときに、大松市長のところに訪問に行った。子どもを連れて。この子は香川県の子なので連れていけないので、オンラインで市長と話をしてほしいかと言ったら、話をするわ、顔を見せるわで、市長がびっくりしていた。「こんなに変わるのですか」と。
- ・なんで変わったか。この子は自信がついたのです。この子は、もう家でずっとこれしか興味がないから、こればかり描いている。それで時間を過ごしている。自信があるのです。
- ・だから、オンラインでいろいろ話をしているときに、「こんな絵を作ったらどうやねん」と私がちょっと仕掛けをしたらすぐ乗ってきます。そうやってこの子は、もうこれを全部作り上げて、自信満々です。
- ・今よく言いますね、自己有用感。そういう自分自身の自信を持つためのことをやってきたなと私は思います。
- ・それから、これを作ったのは「びくか」という子です。この子も中学2年生ですけど、プログラミングだったら何でもできる、何でもする。
- ・この子も先生とうまくいかなかったから、小学校4年から（学校に）行っていません。親も行けと言うのだけれども、全然無理。そして、輝の部屋に来て、NPO法人のやっているスクーリング会場に

来て、そんな子が、やはりここで、自分の一番得意なことができたということで、高校は梅田の通信制に行っています。

- かずくんも、週2回の通信制に、家から出ています。
- 先ほど言おうと思ったのですが、私が保護者・子どもたちと話していて、もう何百人と喋っています。相談を受けています。教育長になる前はずっとそればかりやっていました。そこで私が一番感じているのは、本当に不登校問題を解決するのは難しい。なんぼいい話しても、偉そうな話をしても、誰も子どもは受け入れるわけがない。
- 親は子どものことを心配しています。それはそうです。自分の子育てが間違っていたのではないか、親戚から何を言われるかわからない。そのような毎日つらい生活を親はしている。
- それを私はすごく感じ取ったものだから、不登校への対応というのは、自分自身難しいと思うけれど、やはり子どもの心と保護者の心に寄り添わなければいけないというのが一番大事なのです。寄り添ってあげる、そこが一番肝心なことかと。
- あとで話をしますが、大阪府さんにひとつ要望したいことがあるので、あとでさせていただきますが、そんなことです。
- この絵本はオンラインで、みんなが喋ったり、大学生ボランティアとか、私とかが喋っている中で、クイズをして、一旦、長編物語をつくった。例えば遊びだったら、遊びで、いろいろな物語を、Aという子が何かを喋ったら、それに対して次の子が何かを喋る。そういったものを記録に残していき、「それをもとに絵本を作ってみては」という仕掛けをしたら、みんな乗ってきて、これを作り上げたということです。
- 一人ひとりが認められて、ここが一番大事だと思います。人から認められる、そして、自分自身は自己有用感がどんどん盛り上がってきて、自信がついてきて、何かに次、チャレンジしようというあたりです。
- いつも思っていたのは、「今日より明日いいことあるで。毎日うっつしいやろ」と。男の子だったらゲームばかりしていて、昼夜逆転。「そんなの面白くないやろ。今日より明日よくなるようなことしようや」と。お母さんには、「長い目で見や、あまりぎゃあぎゃああと子どもに言ったらあかんで。必ずそれがまた心の傷になるよ」と話をしながら進めていたところでした。
- 八尾市の不登校対策は、(配布資料の) 21 ページ、22 ページが八尾市でやっていることです。
- 特に、21 ページのほっとはあとサポート、そして、その下の、オンライン de 居場所コースをやっています。
- 今は、小学生が1名、中学生が13名の計14名がこのオンライン上の居場所に入ってくれています。そして、私が言った、自分が実践してきたことは絶対大事だからと言って、これをすぐさま取り入れましょうということで、同じような形のものですが、八尾市はこういうものを行っています。
- それから、不登校を考えると一番大事なのは、子どもたちに、人とモノ、興味関心にいつ出会うか、いつ出会えるかなのです。いま8050、9060(問題)の話がよくあるけれども、家に閉じこもっていたらあかんやろうと。やはりオンラインでいいから、人と出合いをする、顔を見なくてもいいけど、その中に何かいいものが出てくるよ、何かがあるよ、という仕掛けをしてあげなければならないと思います。

- ・人との出会い、それからモノとの出会い、興味関心のあるモノとの出会い。これが不登校対策のすべてです。なんやかんやいいこと言っても、そんなもの実行できなければ話になりません。
- ・最後に大阪府にお願いしたいのは、今年から校内の教育支援ルームに教員を派遣してくれているが、これは画期的です。大阪府はすごいよく考えてくれている。やはり人権教育のすばらしい大阪だと思います。
- ・だから、今、すべての学校には配置されていませんが、1人でも2人でも、1校でも2校でも、校内支援ルームを作ってあげてください。教員を派遣してください。
- ・他市よりも多く教員をつけてもらっていますが、これは効果検証しろよと、この1年間でどれくらい子どもが変わったかということ、ちゃんとしておかないと大阪府に対して申し訳ないという話を校長先生方にしています。
- ・もう一つは、人との出会いの中で、スクールカウンセラーです。スクールカウンセラーは子どもの気持ちを受け取って、ではどうしていくという部分において、すごく効果があると私は思っています。SSW（スクールソーシャルワーカー）もそうですが、実際に子どもに向き合うのはカウンセラーです。
- ・もちろん学校の教員がしなければならない。それがベースだけれども、やはり学校にスクールカウンセラーがいれば、子どもの気持ちも楽になるのではないかなと思います。
- ・これを大阪府には要望として、少しでも増やしてほしいなという気持ちで今日は話をさせていただきました。
- ・もう多分15分過ぎだと思しますので、これで終わりますけども、本当にいい格好したくないから、実際に自分がやってきた嘘偽りのない話ですから、これを委員、知事、教育長に直接言わせていただきました。
- ・もう一つだけすみません。来年4月から、おもしろいことをしようと思っています。大阪府にも今言っておきます。大阪のおっちゃん・おばちゃん集合、八尾のおっちゃん・おばちゃん集合でやろうと思っています。学校の先生も頑張っていますが、人との出会いの中で、おっちゃん・おばちゃんはすごくいい人がいる。その人たちを学校で活用したい。
- ・一般の人に、その子を担任してもらおうと思っています。朝「おはよう。元気?」、夕方「どうやった?」それだけでいい。それを大阪のおっちゃん・おばちゃん、八尾のおっちゃん・おばちゃんにやってもらおうかなと思います。これは全国でやっていないと思います。
- ・どうですか。知事にコメントが欲しいのですが。

(知事)

- ・いや、おっちゃんとおばちゃんの力は強いですから。人と人との出会いという意味では、すごいいい出会いになるなというちょっと期待します。ぜひ教育長にやってもらえたらと、聞いていて思いました。

(八尾市・浦上教育長)

- ・すみません。八尾が先駆けてそれをするかもしれませんが、これはお金はいらぬ話ですから。みんなボランティアでやってもらおうと思っています。やりたいという人はいっぱいいます。

- ・すみません。長い時間ありがとうございました。

(司会・野村企画室長)

- ・浦上教育長ありがとうございました。
- ・それでは続きまして、府立野崎高等学校の田中校長、よろしくお願ひします。

(大阪府立野崎高校・田中校長)

- ・はい失礼します。野崎高校校長の田中と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。
- ・25 ページを開けていただけますでしょうか。
- ・まずはじめに、本校の紹介をいたします。全日制普通科として、大阪府で 100 番目に設置された学校で、現在の 1 年生が 48 期生になります。2 年後には 50 周年を迎えます。
- ・本年度から、府立高校再編整備の対象として、茨田高校と機能統合を行い、茨田高校の特色を引き継ぐ学校としてスタートしております。
- ・本校は課題を抱える生徒が多く在籍しており、今年度の入学生に、懇談などで担任が聞き取りを行ったところ、小・中学校時代に不登校経験のある生徒は 26.7%と、4 人に 1 人以上の生徒が、不登校経験があることがわかりました。
- ・本校は、生徒の問題行動の背景や、生徒が持つそれぞれの課題に寄り添い、一人ひとりを大切にす学校として、開校当初から地域連携を重視した教育活動を展開しております。
- ・様々な事情で学校に通えなかった、勉強に向き合うことができなかつた生徒たちの、セーフティネットとして大きな役割を担っていると感じています。
- ・生徒数は 1 学年 240 人募集しておりますが、今年度はこのような在籍状況です。
- ・次のページをお願いします。
- ・こちらのグラフは、年間 30 日以上欠席がある生徒数の推移です。
- ・年々不登校生徒数が増加傾向にありますが、やはり多少なりとも、コロナの影響があるのかと感じざるを得ません。
- ・令和 2 年度の 1 年生、令和 3 年度の 2 年生、令和 4 年度の 3 年生は同一学年ですが、コロナで多くの学校行事が開催できなかった学年です。
- ・欠席日数については、30 日を少しだけ上回る生徒がほとんどであり、令和 4 年度の 3 年生で年間の欠席が 30 日以上欠席、ここにあります一番右の 40 名のうち 36 名の生徒が卒業しております。
- ・不登校の原因に、人間関係の構築に苦慮する生徒が増えたことは、現在も続くコロナの影響であると感じています。
- ・次のページをお願いします。
- ・次に、中途退学生徒数の推移です。
- ・どの年度も、1 年時に退学者が多いのですが、校外の友人との関係が強く、夜遊びなどで、生活習慣や学習習慣が確立できない生徒が、1 年生のうちに退学に至ってしまうケースが多々あります。
- ・ただ、そのような生徒たちに対しても、寄り添いながら諦めることなく声をかけ続けることで、たとえ退学したとしても、退学後に学校を訪れる生徒もおります。本校は退学した生徒にとって、社会と繋がる数少ない窓口になっていると感じております。

- ・小・中学校で不登校であった生徒が、高校に来てはやはり登校できず、退学してしまうケースも少なからず見受けられますが、学校の取組み次第で改善に向かう例もございます。
- ・3年生になれば、卒業を控え、退学する生徒が少なくなる傾向にあります。令和4年度の3年生の退学者が多いのは、先ほどの欠席者数の多さから、卒業ができなかった生徒に加え、個別に事情を抱えた退学者もおります。
- ・次のページをお願いします。
- ・そのような生徒たちを支える校内体制です。
- ・本校が生徒の困り感に寄り添うために行っている校内のセーフティネットをご紹介します。時間の都合上、本日は、いくつか絞って説明させていただきます。
- ・まず、左、ピンク色で示されるスクールカウンセラーについてです。
- ・スクールカウンセラーは面談を通じて、友人、学校、家庭において、悩んでいることなどについて、生徒と一緒に心の整理を行います。
- ・スクールカウンセラーと生徒の面談の後、教育相談委員会を校内で開き、生徒の状況、面談内容、気になる点などが共有され、専門的な知識から助言をいただきます。
- ・次にその下側、スクールソーシャルワーカーです。
- ・スクールソーシャルワーカーは、福祉的視点から、貧困、経済的問題、虐待、家族関係、ヤングケアラーなど、生徒が置かれている環境の改善を目指します。
- ・次のページをお願いします。
- ・これはスクールソーシャルワーカーの1日の勤務予定表です。
- ・この日は生徒との面談や教頭との情報共有、教員に対して、保護者対応や関わり方のアドバイスを実施いただきました。
- ・本校は年間40日も来校いただいております、大変助かっております。
- ・なお、表中の下から2番目の「ココアル」とは、後ほどご説明いたしますが、本校内に設けている居場所のことです。
- ・次のページをお願いします。
- ・次に、右のオレンジ色の部分です。
- ・居場所は、本校では生徒が参加しやすいように、「カフェココアル」と名付けられ、生徒にとっては、放課後にジュースやお菓子を食べたり、ゲームをしたりしながら、リラックスできる空間となっています。
- ・ココアルでは、社会福祉士等の資格を持った、生徒と年齢の近いスタッフが、生徒にとって気軽に話をするができる大人として、生徒の見守りなどを行っています。
- ・クラス担任を通じ、ココアルの紹介をしますが、自ら進んで参加する生徒は少なく、担当者が発達に課題があるような生徒や、人間関係の構築が不得意な生徒、クラスに馴染めていない生徒、友人の少ない生徒などに個別にアプローチして、ココアルに参加を促しています。
- ・次のページをお願いします。
- ・参加に至った生徒の例としましては、本校では図書室にて、居場所カフェを開催していますが、対人関係の構築に課題のある生徒をココアルに参加させることが難しかったため、図書委員の仕事という

名目で、ココアルの日に図書室に向かわせ、そのときのスタッフの方の声かけがきっかけとなり、ココアルに参加するようになりました。

- ・今まで全く挨拶を返すことも、目を合わすこともできなかった生徒ですが、私がココアルの見学に訪れた次の日は、挨拶をすると、会釈を返すようなことができました。
- ・クラス内では表情を表すことの少ない生徒が楽しそうに過ごす姿を見て、この生徒はこんなに笑うのだと驚くことが多々あります。
- ・ココアルの実施後、振り返りとして、スタッフと本校教員が、どのような生徒が来ていたのか、また、居場所内での様子、どのような会話がなされたのかについて、情報共有を行います。
- ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーに相談するには敷居が高く、相談に行けない生徒が、居場所スタッフを相手に心根を語ることも多々あり、重要な情報を得る場としての効果も高いと感じております。
- ・次のページをお願いします。
- ・不登校の原因として考えられるものを挙げました。
- ・多様な原因を挙げましたが、例えば、成育歴の問題を原因として、生活習慣が乱れている生徒や、何らかの障がいの原因としたコミュニケーションスキルの不足があるにもかかわらず、保護者の障がい受容が進まず、支援を受けていない生徒などがいます。
- ・原因が単純であることの方が珍しく、複合的であるため、解決のための対策を見出すことが難しいです。
- ・また、教員は人事異動があるため、教員自体の経験は豊富であっても、本校独自の生徒の課題や問題に対する見立てを行うことが非常に難しいです。
- ・そんなとき、様々な学校において、それらの対応を経験されているスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーといった専門家から、示唆に富んだアドバイスをいただけることは、非常に効率的かつ有効で、アドバイスをもらった教員は、対応に迷うことなく、生徒の支援を行うことができます。
- ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの存在は、生徒の支援はもちろんのこと、教員にとっても非常にありがたいです。
- ・次のページをお願いします。
- ・最後に、いくつかの本校の事例を紹介いたします。
- ・1人目は3年生のAさんです。
- ・中学2年生のときから不登校となりましたが、高校入学を機に、心機一転頑張りたいと本校に入学してきました。
- ・1年時には、精神的に不安定な場面も見られることから、この生徒に関わる教員が、スクールカウンセラーから助言をもらい、支援を行ってきました。
- ・本人の成長もあり、現在3年生として元気に登校しています。
- ・Aさんは中学時代から興味のあった部活動に入部しましたが、人前で発表することはなかなか難しかったようです。
- ・しかし、スクールカウンセラーと顧問を中心とするフォローもあり、自信をつけ、2年生になり、初めて人前で発表することができました。

- ・次のスライドをお願いします。
 - ・これがそのときの様子です。先日行われた中庭での行事にも出演していました。
 - ・Aさんは学業においても、学年トップクラスの成績です。
 - ・スクールカウンセラーから、顧問や担任の先生方に対し、本生徒の不安定な時期の支援方法について、適切な助言をいただけたおかげで、本人は充実した高校生活を送り、まもなく卒業を迎えることができます。
 - ・次の例としまして、1年生のBさんです。
 - ・Bさんは中学時代、対人不安から支援学級に在籍しており、中学2年時から不登校となり、本校に入学してきました。
 - ・高校1年生の1学期は、スクールカウンセラーから様々なアドバイスを受けましたが、1・2時間目は授業を受け、3・4時間目は保健室で休養し、午後には帰宅するなど、なかなか安定して登校することが難しかった生徒です。
 - ・しかし、根気強いスクールカウンセラーからの支援と、保健室によるエンパワメントやココアルに参加するようになり、2学期以降は元気に安定して
- しています。
- ・欠席日数は19日、2学期中間考査は平均程度の成績です。
 - ・これは、スクールカウンセラーやココアルからの支援に加え、本校が養護教諭を複数配置していることから、丁寧に支援ができた例だと思います。
 - ・次に3人目、1年生のCさんです。
 - ・Cさんは、中学2年次、3年次は、月に1回程度しか登校できなかつたと、中学から引き継ぎのあった生徒です。
 - ・高校1年の当初から、ココアルに参加することができるようになり、そこで友人ができ、今までの欠席数はたったの7日、成績も2学期中間では平均以上の点を取り、元気に登校しています。
 - ・最後に、4人目、1年生のDさんです。
 - ・Dさんは、ADHDの診断があり、要支援生徒として入学してきました。母親と生活しておりました。
 - ・高校入学後は、自宅から登校していましたが、たびたび母親と衝突しており、そのたびに家出をし、警察に保護されています。
 - ・子ども家庭センターの判断で一時保護されますが、帰る家もなく、夏頃には約3ヶ月間、登校できませんでした。
 - ・Dさんが登校できる環境づくりを、スクールソーシャルワーカーに助言いただくとともに、学校ではなかなか指導できない保護者への働きかけや、警察、子ども家庭センターをはじめ、関係施設に対して協力要請していただいたところ、結果、Dさんは現在、新たな居住先から毎日元気に登校しております。表情も明るく、朝早くから登校し、学校が好きな様子です。
 - ・Dさんについては、学校の持つ知識だけでは十分な対策を持つことは不可能でした。
 - ・また、保護者への協力要請の限界など、学校にできることは限られており、スクールソーシャルワーカーからの助言をもとに、外部と連携を持ちながら支援をできた好事例であると考えております。
 - ・35ページをお願いします。

- ・いろいろと事例を挙げてきましたが、不登校生徒に対する支援として、不可欠なポイントをまとめています。
- ・まず第1に、支援の必要な生徒に対する多面的・多角的な生徒理解が挙げられます。
- ・不登校の背景にあるものが、生徒それぞれによって異なり、表面的に見える問題だけで解決できることはありません。
- ・また、本人が抱える困り感は、こちらが想像するよりも複雑で、安直に決めつけることにより、事態がより深刻化していくこともあります。
- ・専門家を交え、様々な角度や視点、立場から支援方法を探ることが非常に大切です。本校では、スクールカウンセラーからも助言が大きいと考えております。
- ・2番目に、学校が安心できる場所であるための支援です。
- ・家庭に居場所がなく、安心して心を開くことができる場所を持たない生徒たちにとって、学校が行きにくい場所であっては絶対にいけません。
- ・遅刻して登校した生徒に対しても、「よう来たな」と迎えてあげるような温かい学校であること。つまり、失敗の中にも、頑張りを認めてくれる大人がいる場所、自分の存在を認めてくれる大人がいる場所でないといけません。
- ・信頼できる大人がいない生徒たちにとって、数少ない相談できる大人が存在する場所として、学校が果たす役割は大きく、教員の他に、専門的な知識を持つ社会福祉士等の資格を持ったスタッフがいる居場所カフェコアアルが果たす役割は非常に大きいと考えております。
- ・3番目は、学校外の関係機関との連携です。
- ・生徒の登校できない環境を改善していくためには、学校だけでできることは限られており、子ども家庭センターや要保護児童対策協議会などの外部機関との連携が必要不可欠です。
- ・その橋渡し役や支援方法の相談相手として、スクールソーシャルワーカーに助言をいただくことで、教員も迷うことなく生徒支援や保護者対応することができます。
- ・とはいえ、生徒の悩みや困り事の原因は日々変化しております。
- ・学校現場も様々な情報を収集しつつ、不登校の生徒が1人でも多く登校できるよう、今後も努めてまいります。どうもありがとうございました。

(司会・野村企画室長)

- ・田中校長、ありがとうございました。
- ・それでは今、お二方から事例発表いただきました。この内容に関しまして、ご質問などありますでしょうか。

(森口教育委員)

- ・浦上教育長、それから田中校長、丁寧なご説明、ありがとうございました。
- ・熱の入った取組みを聞かせていただきました。浦上教育長にちょっとお尋ねしたいのは、現状、教育長がバーチャル、いわゆるネット上で居場所を作っておられる。それをチャットで返事をしたり、全て、されているのは教育長お1人なのでしょうか。

- ・これが普及していくためには、そういう場を学校の中に作っていったとき、どういう人材がそれに対応するのが良いと思われるかというのをちょっと教えていただきたいです。
- ・それと田中校長には、子どもたちが、中途退学の生徒さんたちにも、退学した後も、学校へ来られるようにしていると。それで無事卒業した子どもたち、特に、貴校のホームページを、ちょっと進路とかを見せていただいたのですけれども、やはり就職される方が多いようです。社会へ出ると、学校のようになかなか守っていただけない。
- ・そういうときに、卒業後、就職先の定着という意味では、どのように子どもたちが戻って相談できる、保護者がまた戻って相談できるような対応をされているのか、一つ、ご質問させてください。

(八尾市・浦上教育長)

- ・これは、あくまで学校現場で、不登校がたくさんいますので、ひきこもっている子、家から出ない子が、一番課題があるわけなので、一歩家から出られたらいいのだけど、出られない子がたくさんいます。その子たちをいかにして、気が付かせると言えば、オンラインしかない。子どもはゲームしかしていない。
- ・だから、一番いいのは学校でそういうバーチャル空間をこしらえて、担任とか、カウンセラーとか、支援員と子どもをつなぐ。そして出ようやと。「学校へ」とは言ってはあかんと私は言っている。また子どもはつらい思いするから。
- ・だから、自分が楽な、楽、楽ばかり言うてはいけないのですが、私らの時代から言えば「何甘いこと言うてんねん」となるけど、今は時代が違います。
- ・だから、子どもたちに救いの手を伸ばす。学校が最終的にはバーチャル、あるいはチャット、そういうオンラインでつなぐ。そして関係を構築して、「家から出るか、頑張ろうな」あるいは「学校へ行きたい？じゃあ、おいでや」と、そういうストーリーです。
- ・私が今やっているのは、教育行政とは何か。教育行政は仕掛けを作るところです。だから今はやっていますよ。教育センターで、担当指導主事とか、大学生が頑張っって子どもの対応をしてくれているけれど、本来は学校現場でやるべき。
- ・今は民間でもやっている。東京でもすごいですよ、バーチャル空間。すごいことをやっています。
- ・やはり、一人ひとりの子どもに対応するのは、学校の先生ではないか。本来の仕事が教員ではないかと思う。それを最終的にはしていきたい。

(大阪府立野崎高校・田中校長)

- ・ご質問ありがとうございます。
- ・本校生徒ですね、卒業した後、学校行事のときとかによく戻ってきて、先生に顔を見せます。就職がうまくいかずに帰ってくる子はやはりいるのですが、そのときにも一番うちの学校で有益だなと思うのが、居場所カフェです。
- ・そこで繋がっておくと、学校の先生に相談に行くには敷居が高いとか、なかなかハードルが高い、また、就職後には、自分のいろんな抱えている事情からも連絡を取りにくい場合に、カフェコアルの社会福祉士の方とメールをしたり、LINEをしたり、ということでアドバイスもいただいている。
- ・そこで繋がりを持っている、卒業後もかなり有益かなと感じています。

(中井教育委員)

- ・失礼いたします、中井でございます。田中先生にちょっとお願いしたい。
- ・そして、生徒の困りに寄り添う校内セーフティネットも素晴らしい取組みをされているなというふう
に思っているところですが、2つ、時間の都合もありましてね。
- ・まず、スクールカウンセラーなのですけど、1日5時間なのですが、年に13回。月に1回かちよつ
と。その1回あたり3、4件の相談との説明でした。
- ・先生のご感想でどうでしょうか。私はもっと生徒に呼びかけたら、もっと必要な生徒がいっぱい出てき
て、月1回ではとんでもない、足らないのじゃないかなという感覚があります。その辺の先生のご感
想をお願いしたいと。
- ・もう一つです。居場所づくりも素晴らしい取組みだと思っているんですけど、社会福祉士の方と生徒
の繋がりは今伺いましたが、学校の教員はどんなふうに関わっているのか、ちょっと教えてくだ
さい。

(大阪府立野崎高校・田中校長)

- ・ありがとうございます。スクールカウンセラーの回数についてですが、正直申し上げて、もっと来て
いただきたいと思っています。
- ・理由としまして、やはり生徒だけではなくて、教員、また保護者も、面談に来られる場合もありまし
て、予約がすぐいっぱいになります。そのような状況です。
- ・それから居場所については、社会福祉士の方に現場は任せていますが、やはり教員も様子を見に行っ
たりということを行います。その後、生徒が帰った後、社会福祉士の方と本校教員がミーティングする
場所があります。そこが一番有益で、「先生に黙っておいてほしいけど、こんなことを言っていました
よ」とか、そういった情報がどんどん出てくる場所が居場所カフェのミーティングです。

(中井教育委員)

- ・ありがとうございます。僕も長いこと校長をしていたのですが、スクールカウンセラーは実は同
窓会にお金を少しお願いして、週2回来てもらった。それでも毎回毎回、予約がすぐに埋まってしま
うような状況でした。
- ・でも、カウンセラーに相談することによって、だいぶ生徒の表情が変わっていったという実感として
は、持っています。私は社会福祉士を活用した居場所づくりまではできなかったのですが、教育相談
室やスクールカウンセラーとの相談室は設置した経験があります。ちょっと心配しましたが、専門
家に丸投げしてしまうと、学校としては不十分な部分があるのではないかと思います。
- ・ただ今、おっしゃったように、放課後、教員と情報共有される、しかも、生徒が黙っていてねという
話も、教員は守秘義務を持っていますから、これを絶対話し合わない、とんでもないことが起こり
ますので、そうされていることを聞いて、素晴らしいなと思いました。ありがとうございます。

(井上教育委員)

- ・ご説明ありがとうございました。質問というよりも、お話を伺った感想なのですけども、お二方のお話を聞いていて、きっかけといいますか、居場所づくりというの、バーチャルとリアルということやられているのかなというように思って聞いていました。
- ・特に、浦上教育長のバーチャルの活用というのは、この技術の進展を早く取り入れられていて、素晴らしいなと思って聞いていました。
- ・ここにいる大人は、生まれてから、すぐにスマートフォンで繋がっているということではなくて、大人とは感覚が違うんじゃないかなと思っています。バーチャルに対して。
- ・そこのところをもっと取り入れていって、リアルが良くてバーチャルが駄目だみたいな、そういったことではなくて、バーチャルもリアルも両方いいんだよと、どっちも行き来しましょうよ、ということが今進めておられることかなと思いました。
- ・僕が今、一緒に仕事している人は、元々引きこもっていたのだけど、バーチャル空間みたいなものに出会って、それで会社を興して成功していますという人たちとか、V T u b e r と呼ばれる人たちというのは、顔を出さなくて、世界的に活躍しているとか、あと、スタートアップのグローバルで活躍しているところの人たちなんていうのは、もう顔も見たこともないけれども、エンジニアが世界中で繋がって仕事しているというようになってくると、かえってリアルだけでやっている人は、バーチャルで仕事ができるようにならなくてははいけませんし、さっきおっしゃったバーチャルで、はじめから入口を作った子は、もしかしたら、これから世の中で活躍の芽がもっと出てくるかなというように聞いていましたので、やっぱりちょっと意識を変えて、バーチャルの捉え方っていうのを、もっと取り入れていく、技術の力を取り入れていくことが大事かなと思いました。
- ・それと、田中先生のところですね、もうこれはプロの力を借りることが大事だということをよくわかりました。
- ・学校の先生も、すごく一生懸命やられていると思うのですが、基本的にやっぱり学校の先生の仕事はすごく多いんじゃないかなというふうに僕は思っています。
- ・なので、そこのところの線引きというのをどこかでしないといけないなとずっと思っているのと、そこを、さっきおっしゃった「先生には言いにくいんだけど、スクールカウンセラーの人たちには言えるんだ」とか、あと、浦上教育長がおっしゃった、大阪のおばちゃんとおじさんを集めてくるというのも、もしかしたら、その近所の方々を、バーチャルもあるし、リアルのところでも、大阪の近所の人とか、もしかしたらたまに来てもらう、他人で話せる大人、そういった人たちに、いろんな悩みを打ち明ける、そういう自分の話す場を作ることが大事かなと思いました。
- ・そこでそういった取組みが非常に大事だなということがよくわかりました。本当にありがとうございました。

(八尾市・浦上教育長)

- ・本当にひきこもっている子どもへの対応としては、私はバーチャルを考えていたのです。放っておいたらどうにもならない。
- ・当然、リアル、面と向かって話をし、コミュニケーションを交わすのは、ものすごく大事です。社会の一員になるために一番大事です。だから両面です。

- ・八尾でやっているのも全部そうです。バーチャルだけにしていない。リアルもものすごく大事という認識を持っています。実際にやっています。

(竹内教育委員)

- ・両先生ありがとうございました。
- ・時間の関係で田中先生にだけ一つ質問があるのですが、教員は異動して行って、学校文化を継承するのはなかなか難しい。スクールカウンセラーとかスクールソーシャルワーカーの皆さんはどれくらいのスパンで働いていて、どのように文化を継承していくか。聞くところによると、非常勤の先生もかなり多くおられるということなので、そのあたりが継承されないと、母校へ帰ってきても知っている先生が、カウンセラーの方がおられないというような状況は避けたいなと思いますが、どんな状況なのでしょう。

(大阪府立野崎高校・田中校長)

- ・私もこの4月に赴任したばかりなので、以前のことは存じ上げてないのですが、本校に来られているスクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーの方は、非常に本校のことをよく理解していただいておりますので、前年度から引き続いてお願いした方ということで、今後もお願いしたいなということで、私も考えているところです。

(竹内教育委員)

- ・長期に渡って雇用が継続されるというようなことがあれば、先生が異動しても、支えることができるかなというように思いましたので、状況を聞いておきたかったということと、浦上先生がおっしゃったように、おじちゃんおばちゃんに来ていただいて、そちらの方で継続していくということも考えられますけど、やはり専門職で継続した方がいいかなというふうに思いましたので、質問させていただきました。ありがとうございました。

(知事)

- ・ご質問よろしいでしょうか。
- ・まず、今日は浦上教育長、田中校長、ありがとうございました。
- ・非常に示唆に富んだ取組みを、実際に現場でされているなというようにお聞きして、非常に参考になりました。
- ・まず、浦上教育長に少しご質問というか、アドバイスいただけたらなと思うのですが、非常に印象に残ったのが、人と人との出会いを作っていくというのはすごく大事だということ、モノとの出会いを作っていく、そのきっかけをつくるのが非常に大事だというのは、私もそうかなというふうに思いました。
- ・そこで信頼関係を築いて行って、例えば外に出る、あるいは学校に行く機会を増やす。そこを入口として、結局はやはり、人と人との出会いだったり、人とモノとのなんらかの出会い、きっかけがまず大切で、その手段として、バーチャルを活用されているということなのかなと思いました。

- ・八尾でやられていることを、他の市町村に横展開をしていこうとすれば、どういうことがあれば、横展開しやすいか。逆にいうと、ハードルが、こういうことがあったのですというのがわかれば、こういった課題は、我々として取り除いていけば、横展開しやすくなると思うし、バーチャルでのコミュニケーションにまず慣れて、最初にそこで人と触れ合うことから始まって、そして実際に学校であったり、外に出ていくということに、一連のプロセス、熱量がすごく大切なのだと思うのですが、横展開するために、こういうふうにしたらいよというのがあれば、教えていただけたら。

(八尾市・浦上教育長)

- ・大阪の府下市町村で取り入れているところがあると思うのです。
- ・民間が、市が委託してやっているフリースクールがあったと思うのですが、大阪府が、八尾でこういうことをやっていますよと、これがすごくいいことだから各市町村に投げてもらおうというのはありがたい話です。
- ・簡単です。システムの言っても、私が指示して2ヶ月でやりました。私は去年の4月から教育長になったが、4月から考えていて、担当のほうには9月からやると、実際にやっていますから。
- ・これは民間と契約をして、場面を市が作り上げるのではなしに、基準データがあり、そのデータを基にして細工して、八尾版を作り上げる。
- ・あとは担当指導主事あるいは大学生ボランティアを活用しながらやっていく。2ヶ月、3ヶ月であつという間にできる。大阪府でも来年度からでもできる。そんなにお金もかかりません。

(知事)

- ・端末は1人1台パソコンを配っている。それを使っているのか、それとも何か、個人の携帯とかを使っているのか。どんな感じやっているのですか。

(八尾市・浦上教育長)

- ・それはシステムの、一人ひとり端末を配っており、それらも含めて子どもの状況に応じて活用しています。

(知事)

- ・ありがとうございます。
- ・浦上教育長と田中校長の話をお聞きして、自分の中でいろいろ頭を整理しているのですが、義務教育の小・中学校と高校でちょっと違うのかなと思っていて、小・中学校では、地元の子が地元の学校に通うのが普通じゃないですか。だけど、高校はそうじゃなくなっている。
- ・このデータにもありましたけど、不登校の在籍率が10%以上の学校が32校あって、それが全不登校の半分以上占める。対策の選択と集中をやった方が、高校はすごくいいのかなと思っています。
- ・田中校長は、実際、現場ではココアルという居場所づくりというのをされて、じゃあココアルという居場所づくりが全部の学校にいるかというのと、そうではないのではないかと思っているのですが、そのあたり何か意見があれば。こういうふうにやったら、不登校在籍者数の多い学校で、有効だよっていう横展開する上での課題というか、そういうのを教えてもらえたら。

(大阪府立野崎高等学校・田中校長)

- ・ありがとうございます。
- ・居場所については、本校のような学校は、府立学校の中でもセーフティネットというところが必要なのかと。その多くが中学校の先生から聞こえてくる声として、小・中学校は停学も退学も何もそういう手段がない中で大切に義務教育の中で育てられた生徒たちが、次に高校に行ったら、どこでこの子らの面倒見てくれるのだろうかというのを、中学校の先生の声がよく聞こえてきます。
- ・そういった子らを、高校卒業の権利を取らせる学校として残していくためにある学校として、そういう学校にとって居場所は非常に有益なのかなと思っています。
- ・話の中でも言わせていただきましたが、その何が原因で学校に行けていないのか、勉強に集中できなかったのかというのは、本当に人それぞれで、わからないところなので。
- ・野崎高校では、入学志願者は非常に少ないのですが、なんとしても面倒見てほしいという中学生の先生の思いで、野崎高校に行ったら何とか面倒見てくれるんじゃないか、高校卒業の資格が取れるんじゃないかと、期待をされている学校として、そういう学校としましては、こういうスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、居場所というものは本当に必要だなということで思いますので、全校に必要かどうかというところは、ちょっとなかなかわかりかねますが、本校のような学校にとっては、非常に有益なシステムだと考えております。

(知事)

- ・不登校の原因というのは、本当に生徒で完全に様々で、一概にこれですというのはありません。大事なのは、それぞれ生徒に個人的に寄り添っていくことで、そして寄り添っていける環境をちゃんと作っていくのかどうか、仕掛けを作っていくのかどうか、大切ということかなと。
- ・そして、校内教育支援ルームに校内支援員も配置しましたが、浦上教育長からこれは有効だという意見をいただきましたから、ちょっと我々もこれをしっかりとまた充実させていきたいと思ったり、スクールカウンセラーも充実をさせていきたいなというように思います。
- ・ただ、数字を見て思ったのが、田中校長から今回不登校がぐっと、大阪府もそうですけど、全国的にも増えている。コロナの影響がすごくあったという意見がありますけど、浦上教育長はどうか、現場でやっていて、数字データ上も明らかに全国でも府内でもコロナ禍でぐっと2倍とか1.5倍も増えているんですけど、コロナの影響でちょっと変わった、コロナが不登校を増やしたというか、そこで学校の環境も変わったので、それが影響したというのは、小・中学校でも感じるころはありますか。

(八尾市・浦上教育長)

- ・コロナの影響があって、令和2年から、やはり保護者のほうが「すごく心配やから、もう行かんでいいよ」というような雰囲気も多々ありました。
- ・私が思うのは、一番は、生活のリズムが変わったということです。生活のリズムが変わるということは、自分は学校で、こんな状況の中で学校に行って、何をするのか、わからなくなってきました。ある

いはクラブもできない、給食も食べられないとかを小学生は思うので、そういうのはすごく大きく影響していると思います。

- ・だから、これでコロナがなかったら、こんなに不登校が増えなかったのではないかとは思いますが、すべてそれが要因だとは私は思いません。ただ、ベースにあるのは、学校という環境が変わってしまったということは言えると思います。
- ・やはり自ずと増えています。八尾のほうも、この3年間で増えました。

(知事)

- ・学校生活が、コロナ禍を過ぎて、一定元に戻りつつある中で、コロナを経た対策として何か重要なこと、こういうことが重要だと思うことは何かありますか。

(八尾市・浦上教育長)

- ・学校行事も、令和5年度は完璧に普通になっています。令和4年まではまだまだ、卒業式や入学式でマスクをつける、つけないというように言っていました。今はもうおおかたつけていません。中学生で女の子が、かっこ悪いからつけて行こうと（いうくらいです）。
- ・そんなこともあって、1年間の行事はある程度、普通に戻ってきています。これから、コロナがどうかはなしに、生活リズムを回復していったら、私は元に戻せると判断しています。
- ・運動会でも、あの当時、学年ごとでしかできなかった。集まったらあかんということで、小学校・中学校でも1年2年、あるいは3年4年、5年6年と、それぞれ分かれてやっていた。
- ・それが今、八尾でも、だいぶ今までどおりの全員でやるという、そういうような運動会の復活も、体育大会の復活もしていますので、ぼちぼち変わっていくのではないかと、元に戻っていくと思っています。

(司会・野村企画室長)

- ・ありがとうございました。
- ・浦上教育長、田中校長はここまでとなります。本日は貴重なお話を頂戴いたしまして、誠にありがとうございました。
- ・それでは、不登校の現状、課題整理とただいまの事例発表を踏まえまして、教育庁より今後の取組みの方向性についてご説明をお願いします。

(教育庁)

- ・それでは、資料3-5「今後の取組みの方向性（案）」についてご説明いたします。
- ・資料の37ページをご覧ください。
- ・不登校については、冒頭の現状と課題の説明時にも申し上げましたとおり、主に上段にお示ししておりますような課題があると認識をしております。
- ・特に、不登校となる時期が低年齢化し、かつ、一度不登校となると、継続する傾向があることから、小学校段階からの継続した包括的な取組みを行おうと考えております。

- ・そこで今回、仮称ではございますが、「大阪府不登校支援パッケージ」として、今後、大阪府で進めていきたい取組みをとりまとめております。
- ・取組みの方向性として、左側の「不登校に繋がる要因を摘み、不登校を未然に防ぐ」、そして、右側にお示ししております、「不登校となった後も、学びを保障するとともに、教室以外の居場所をつくる」の2つの観点を掲げております。
- ・不登校になる前に行うべき取組みとして、「誰もが安心して学べる魅力ある学校づくり」についてです。
- ・その中の1点目として、要因を摘むという観点から、安全・安心で楽しく通うことのできる魅力ある学校づくりを進めていこうと考えております。
- ・具体的には、児童生徒の興味関心を高めるような授業づくりをはじめとする、学ぶことの楽しさを実感できるような教育活動と、支援人材を活用した、いじめ重大事態の抑制と早期解決であります。
- ・2点目として、欠席が続くなど、不登校の兆しが見えた段階で、スクールカウンセラー等と教職員が連携し、児童生徒のアセスメントを行う、チーム学校による早期対応を進めていきたいと考えております。
- ・特に、不登校の低年齢化が進み、ここ3年で2倍と急増している小学校と、不登校の在籍率が高い府立高校を対象に、スクールカウンセラー等によるアセスメントを強化し、早期対応を進めていきたいと考えております。
- ・また、アセスメントを、小・中・高と適切に引き継ぐことができるよう、校種間連携、特に設置者が異なる中学校と高校での校種間連携を強化していきたいと考えております。
- ・次に右側、不登校となった児童生徒への対応として、「すべての子どもが学びにアクセスできる環境整備」を進めてまいりたいと考えております。
- ・1点目として、不登校生徒の学びを保障するという観点から、府立高校において、新たな学びに向けた検討を進めたいと考えております。
- ・現在、国で議論されている内容を踏まえながら、不登校の生徒が自宅等から、同時双方向の遠隔授業の受講を可能にするなど、学びを柔軟化させるほか、単位認定にあたって、出席状況や定期考査の要件等を柔軟に対応したり、通信制高校等の機能を強化し、他校に在籍する不登校の生徒に向けて、単位習得に必要な講座を開設するなどの取組みを検討してまいりたいと考えております。
- ・さらに、全国において、公立学校の設置はまだ例がございませんが、府立高校において、「学びの多様化学校」、いわゆる不登校特例校の設置を行いたいと考えております。
- ・次に、教室以外の居場所をつくるという観点から、これまでに行っており、一定の成果を見せている取組みを、さらに充実したいと考えております。
- ・具体的には、今年度から、課題が多い小・中学校に、校内教育支援ルームの設置を支援するため、府が児童生徒の対応を行う支援員を配置しているところですが、支援員を配置した学校では、新規不登校者数が昨年度と比べて減少するという効果が出ております。
- ・一方、課題の大きい学校が増加していることから、支援員の配置を充実させ、市町村での設置をさらに促進してまいりたいと考えております。

- ・府立高校では、不登校の傾向がある生徒等が、安心して過ごすことができる居場所を設置したいと考えており、特に不登校の生徒が集中している 32 校を中心に、NPO等と連携した居場所事業の実施をこれまで以上に進めてまいりたいと考えております。
- ・以降のページは、今ご説明いたしましたそれぞれの取組みの案の個票となっておりますので、説明は割愛させていただきます。
- ・以上でございます。

(司会・野村企画室長)

- ・それでは、ただいまの内容につきまして、意見交換に入らせていただきます。
- ・まず、本日ご欠席の岡部委員からご意見をお預かりしておりますので、ご紹介をお願いします。

(教育庁)

- ・岡部委員のご意見をご紹介します。
- ・不登校の子どもへの支援を行うにあたり、4点意見を述べさせていただきます。
- ・1点目は、学校として、子どもたちへのアウトリーチの重要性について。
- ・大学においても、不登校の生徒がおり、その生徒の話を知ると、相談に行くことが恥ずかしいことと捉えており、また、自分の嫌な部分に向き合うことを避けたいとの理由から、自分から直接相談することをためらってしまうとのことであった。
- ・そのような子どもたちもいることから、相談を受けるだけでなく、アウトリーチの方策もご検討いただきたい。
- ・2点目は、そのような子どもたちの居場所が、学校外にも必要であるということ。
- ・校内の支援体制を充実させていくという、今回の対応案には賛成であるが、学校内に安心する居場所を見つけられないような子どもたちもいるので、そういった子どもたちが、学校外にも居場所の選択肢を持つことができるよう、教育支援センターの充実をはじめ、福祉機関やフリースクールなどとの連携など、様々な方策を進めていただきたい。
- ・3点目は、教員が子どもたちに向き合い、適切に状況を見立てるためには、教員自身が余裕を持つことが重要であるということ。そのためにも、教員の働き方改革を進め、子どもたちが不登校となる前に対応できるように、また、他の教員や専門人材に安心して相談できるように、教員の環境を整備するなどが重要。
- ・最後の4点目は、子どもたちの状況、アセスメント結果を引き継いだり、情報共有する際の個人情報の取り扱いについて。子どもたちへの支援を行うにあたっては、個々の状況やアセスメント結果の共有が、適切な支援を検討するための重要なステップになるが、一方で、個人情報の取り扱いに慎重になりすぎるあまり、教員が情報共有を躊躇してしまうことが危惧される。
- ・府として、子どもたちの状況やアセスメント結果の共有方法について、指針等を作成、明示し、教員が個人情報を安心して他の教員や専門人材と共有することができるようにしていただきたい。
- ・以上が岡部委員からの意見でございます。

(司会・野村企画室長)

- ・それでは、教育委員の皆様でご意見、ご質問等がございましたら、挙手をお願いします。
- ・中井委員、お願いします。

(中井教育委員)

- ・先ほども、田中校長先生や浦上教育長からお話のあった共通事項として、支援ルーム、居場所づくりが重要だとおっしゃられたことに、本当に共感いたします。
- ・今、岡部先生が言われたことも全くその通りかなというように思うのですが、一つ、私の意見として申し上げたいことがあって、その方向でどんどんやっていただくことは素晴らしいことと思うのですが、今、現状では、例えば、いじめが起こったと、そして、起こったことに対してどうしよう、ああしようというような会議がなされる。そのような会議では後追いになってしまいますよね。
- ・ですから、そういうのを未然に防止するような会議、そのためには、例えば、どんな名称でもいいのですが、例えば「不登校防止委員会」とか。そこに、当該の学年の先生、あるいは、そこにスクールソーシャルワーカーまたはスクールカウンセラーが、両方はなかなか難しいと思うのですが、入ることによって、そして情報を共有して、これおかしいねという生徒があったときは、もう本当に早く手を打つということが非常に重要じゃないのかなと私は思います。
- ・昔は、スクールソーシャルワーカーであるとか、スクールカウンセラーの配置がなかったので、担任の先生が本当に一生懸命にやられていた。そんな時代と比べたら、今はものすごく増えているわけですから、当然、専門職の先生は、どんどん入れていただいて、そして、教員の負担をなくす、教員に対しても、負担をなくすだけではなくて、ノウハウを教えてもらうということを、これからとても大事になってくると思います。
- ・冒頭のグラフの中でもですね、原因のグラフがございまして、「どうしてその不登校になったのか、よくわからない」というのがありました。
- ・ページ数で言いますと、7ページ、8ページ、この小・中の状況だと思うのですが、どんどん増えているというのは、「無気力・不安」の部分です。この辺が解消するだけでも、ずいぶん違ってくるかなと思います。
- ・この無気力であるとか、不安というのは、担任の先生が、教員が、生徒のちょっとしたサインとか、行動とかの、気づける部分はたくさんあると思います。だから、ここをしっかりと押さえていくということが、まず、不登校減少に繋げる一つの方法だと思います。いろんな方法がたくさんあります。いっぱいあります。全部をなかなか同時進行は難しいと思うのですが、例えば、こういうものすごく顕著に増えているところ、ここに対する取組みというものを、特効薬ではないのですが、事前に生徒の情報をみんなが共有して、そして早めに専門家が、例えば精神科のお医者さんに繋ぐとか、校医さんに相談するとか、いろいろあると思うのですが、そして保護者にも状況を伝える。保護者も巻き込んで、生徒を良い方向に導くというのはとても大事だと思いますので、そういうようなことを各学校で、これから特にやってほしいのは小学校。小学校段階できちんとそれを押さえていかないと、小学校、中学校と、どんどんそのまま行ってしまいますから、まず小学校、これはとても大事だと思います。
- ・高校生ぐらいになりますと、かなり自分で判断することもできます。発達段階が上がっていますから。小学校の子どもたちはようしませんから、やはり大人の助け、一番身近な先生、専門家に丸投げする

のではなくて、まず先生が主で、もちろんそこに専門家が入って、そういうような取組みをですね、全国展開していったらどうかと、私は前から思っていますので、少し意見を述べさせていただきました。以上です。

(司会・野村企画室長)

・井上委員、お願いします。

(井上教育委員)

- ・少し中井委員と話がかぶるのですけれども、7ページ、8ページのところで、教員が感じているところの「無気力・不安」というところと、生徒が感じているのは、「先生のこと」とか、「勉強がわからない」というようなところにギャップがあるのではないかなというふうに思っています。
- ・もっと大事なのは、先生が、何で無気力になって、何が不安になっているのかというところを、これ突き詰めていく。もちろんすごく難しいと思うのですが、ここが大事かなというふうに思っています。
- ・ですので、この「無気力・不安」で、もしそういうようにまとめてしまっているのだったら、なぜこうなっているのかというところが、先生が、例えば忙しすぎて、なかなかその原因、なぜ無気力になっているのか突き止めにいけないとか、それとも、先生にはカウンセラーの人たちみたいにスキルがないのか、それだとスキルをつけてもらうというようなことがすごく大事かなと思いました。
- ・もう一つ、「勉強がわからない」というところ、ここに対しては、手当ができるのではないかなと思っています。
- ・僕は専門家じゃないのですが、よく言われるのが、算数で、3年生ぐらいになって、分数がわからなくなったら、もう学校に行きたくなくなっているというようなことはよく聞きます。
- ・だから例えば、こういった特定の科目、特定の領域について、みんなここがわかりにくいとかがあれば、そこを何か手当していくというようなことで、勉強がわからないというのは、複数回答であっても、高いこの回答がありますので、これはやっぱり小学校のときからやっていくというのは大事かなと思いました。
- ・もう一つ、相談をしないというところ。小学生・中学生・高校生の子は、親にもなかなか自分のいじめがあったとかを相談しにくいところですね。先生にというのは難しいかなというふうに思います。
- ・やはり第三者で相談できる仕掛けです。さきほどの岡部先生の話もありました、大学生ですら、なかなか相談しにくいというのがあれば、カウンセラーの人たちにお問い合わせとか、また、企業でも、自分の悩みはやはり上司とか、会社の人事になかなかしにくいので、外に相談の窓口を設けたりとか、コーチングを受けるということは今、進んできているかなと思いますので、ぜひこれはプロの力を借りて進める時代かなと思っていますし、先生方の負担を軽減する意味でも、カウンセラーの配置というのも、先日も事務局の方からご説明を受けたときにも、大阪府もかなり、先ほどのご説明だと増えてきているとはいえですね、まだまだ東京都とか、他の府県と比べるとカウンセラーの派遣の数というのは少ないというように聞きましたので、そここのところを予算措置していただいて、増やすということも、先ほどの田中先生のお話を聞いて大事かなと思いましたので、ぜひ検討していくべきことかなというふうに思いました。以上です。

(司会・野村企画室長)

- ・森口委員、お願いします。

(森口教育委員)

- ・私の方からも二、三点、要望も含めて。
- ・先ほど、浦上教育長のお話にもありましたように、学校には来られていない子と、ちょこちょこ来られている子がいて、全く来られていない子たちに、どうアプローチするのかというのは、もう学校現場としては解決方法がないなど。
- ・特に、不登校の子どもたちが低学年で増えている。小学校の2年、3年生ということになると、自分自身を表現できない。「おなか痛い」と言っても、学校に行く時間になるとおなか痛くなって、行けない。お母さんにしてみたら、おなか痛いのだったら行かなくていいよというようなことで、ズルズルと何となく表現できないままに進んでいく。
- ・そういった年齢のお子さんたちに、少し早い段階でこちらが気づいていくためには、一つの方法として、今、いじめなんかでアンケートを定期的に取りっているような、そのようなアンケートを少し取り組むことで、早い段階で子供たちのサインを見つけるというような提案も、私は少しできたらなと思っています。
- ・それらは基本的には来ている子たち、時々でも休むけれども、学校に来られている子たちには、そういったアンケートが届きますけれども、学校に行けていない子どもたちには、やはり八尾で取り組まれているような、ああいう取り組みっていうのは、非常にこれから先、要るようなことだと思えますし、先ほど知事が、横展開するためにはどうしたらいいのかとおっしゃっていました。
- ・それも実際のところは、学校現場で教育長一人がするというのではなくて、学校現場で、組織だって取り組んでいくということは、一つ、すぐできることなのではないかなと思いました。
- ・同じく、おっしゃっていたのが、学外でも、居場所とか、そういう支援ルームに行っていれば、全て出席カウントしているのだと。そういうことは、考え方を大阪府教育庁や、市町村教育委員会として、がらっと自分たちの考え方を変えて、どういう場面でも、子どもたちが自ら行こうとしているのであれば、そこは学びの場だよというような認識を私達が持って、そこから大きく変えていくことはできるのではないかなと思います。
- ・先ほどの高校でのカフェのお話、知事の方からは、集約して、一定のところに集中してというお話がありました。
- ・まずは、モデルが必要。例えば、学校が似通ったエンパワメントスクールとか、必要とされているところにまず配置して、その中での有効性というものを見極めて、府立高校に、たとえそのカフェが必ずしも不登校に対応したカフェでなくてもいいと思います。進学校であっても、子どもたちの悩みというのは、決してないわけではないので、そういった様々な子どもたちの悩みに寄り添える場が、もしカフェというものなのだとしたら、とてもいいお話を聞かせていただいたので、そういうことを最初は重点策として、まずはこういうところに、さらにこの良さを、また展開していくというような形が可能なのではないかなと思いました。
- ・最後1点、教員の負担というところは、私は本当に常々思っております。

- ・教職員の成り手も非常に少ないところで、有能な人材を府教育庁に配置していくためには、教員の指示で動ける、チーム学校の中の多職種の人材を充実。そしてまたそこに人材を配置した後、教員の指示でスクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー、また支援員も、そして時には、学校医なども動かしていただきたいと思っておりますので、そういうあたりも、教員の働き方ということでもお考えいただけたらと思います。

(司会・野村企画室長)

- ・竹内委員、お願いします。

(竹内教育委員)

- ・私の方からも、学校なので、先生が入口になって、生徒を見ていくということが非常に大切になるかと思いますが、今どう見ても余裕がない状況なので、少し先生方に余裕を与えて、一人ひとりの子どもたちを見る機会を増やしていただきたい。ということは、やはり人的配置を少し多く、そういう学校に対しては図っていく必要があるかと。
- ・知事がおっしゃったとおり 32 校、特に選択・集中して、そのところに教員の配置を厚くするというようなことは、府立高校においては、極めて大切ではないかなと思います。
- ・スクールカウンセラーとか、スクールソーシャルワーカーが、今日は際立って強調されていましたが、やはり入口は先生であると思いますので、小・中学校においても、先生の配置をしっかりと検討する必要があるだろうなというように思いました。
- ・スクールカウンセラーの友人がいますが、比較的身分が不安定であるということを、繰り返し聞かされています。守秘義務もあり、かなり大きな責任を持って、継続的に指導していかないといけないものなので、ぜひこういう人たちの待遇改善なども、またご検討いただければというように思っています。
- ・あと、オンデマンド型の通信教育を活用できるよう、学びの柔軟化についてというのが、40 ページ、44 ページ、「すべての子どもが学びへアクセスできる教育、環境整備」というところに書かれておりますが、不登校生徒が在籍する学校で実施するということは、1 人でもいたらそれを保障していくというような書きぶりなのでしょうか。
- ・ページ番号でいえば 40、先ほどの個票では、「今後の取組みの方向性 (案)」の「②すべての子どもが学びへアクセスできる環境整備」の中のピンク色の府立高校のところの一番上のところに、「柔軟化について不登校生徒が在籍する学校で実施を検討する」と書いてありますけど、これは 1 人でもいたら保障していくという方向性なのでしょうか。それとも、これは通信高校の方に、桃谷高校に、センター的な役割を担わせる方向で検討されているのか、お聞かせいただければと思います。

(教育庁)

- ・事務局からお答えいたします。
- ・今、国の方で検討されているのですが、柔軟化をもたせていこうという中で、我々としても、全日制高校でも、今は定時制高校と通信制高校で、単位を定時制高校に通いながら通信制の単位を履修できるというようなことがあるのですが、それを全日制高校にも広げていきたいなというように、これは

まだ国の方の方針が出てないですけど、それが出ましたら、我々としても、そういう方法でやっていきたいということで、不登校生徒に限らず、そういった方々も含めてなのですが、学びを柔軟化していく。

- ・そこは、どこの学校ということで絞っていくという可能性もありますけれども、まだその辺の詳細を詰めておりませんが、基本的には全校でやれるような体制はとっていききたいというように考えています。

(竹内教育委員)

- ・ありがとうございます。
- ・極めて重要なことで、どこからでもアクセスできる、多様な学校でできるという方がいいかなという感じを持ちましたので、ぜひ推進していただければと思います。以上です。ありがとうございました。

(司会・野村企画室長)

- ・他のみなさまから、他にご質問・ご意見はございませんでしょうか。
- ・それでは、教育長、続いて知事からコメントを頂いて、この議論を終わりたいと思います。まずは、教育長からよろしく願いいたします。

(橋本教育長)

- ・不登校の問題は、これを放置しておりますと、ひきこもりに繋がり、ひきこもりになりますと、ご本人、ご家族だけじゃなく、社会全体から見ても、大きな損失になりますので、学齢期の段階で、人との繋がり、外との繋がり、これが切れないようにしっかり対策をしていきたいというように思っております。
- ・現在、資料でも説明がありましたが、不登校となる時期が小学校、低年齢化して、かつ、それが継続する傾向があるということですので、まずは小学校段階での対策、本日、浦上先生の方から、校内支援ルームの充実と、スクールカウンセラーの充実というお話がございましたけども、市町村教育委員会の意見も聞きながら、府教育委員会として、しっかり役割を果たしていきたいというように思っております。
- ・それから、高校の方でございますけども、高校段階におきましては、中学校で不登校になった生徒の多くが、私立高校の通信制に通っているのではないかなと思います。
- ・これは、私立の通信制というのは、通信制ではありますけども、週1回から5回の間で、好きなように、通学できるコースなどが用意されて、非常に学びが柔軟化されています。そういうところが不登校経験とかを惹きつける要素かなというように思っております
- ・府立高校におきましても、中学校で不登校を経験した子どものニーズに応えるということで、府立の通信制1校、桃谷高校がございまして、資料にありますように、学びの柔軟化を、まずは検討していきたいというように思います。
- ・これについては、知事からもお話ありましたが、課題が集中している、まず32校で、スタートして、その後、拡大を検討していくというのが現実的な方向かなというように、私自身は思っておりますけども、今後、詰めさせていただきたいというように思います。

- ・それに加えて、さらに、大阪市の方で来年の4月から、学びの多様化学校の中学校が設置されると思いますので、その卒業の後の受け皿ということも考えまして、高校で学びの多様化学校を、また知事とご相談させていただきましても、ぜひ作っていききたいなというように思っております。
- ・こうした取組みによって、できるだけ学校段階で、社会との繋がりが切れない、子どもの自立をしっかり支えていきたいと、そのように考えております。以上でございます。

(司会・野村企画室長)

- ・知事、お願いいたします。

(知事)

- ・不登校の児童生徒が増えている、増加している傾向にあるのは明らかだと思います。その中で大切なことは、児童生徒一人ひとりに寄り添った環境対策を充実化させていくことが重要だと思います。
- ・今日の教育委員会の先生方の意見、また、田中校長、浦上教育長の現場からの意見も踏まえて、不登校支援パッケージを構築します。
- ・これまでとってきた対策に加えて、より効果的に不登校の支援策を大阪府において充実させていきます。スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーの充実、そして、教育支援ルームの充実、そういった点を小・中学校においても図っていく。
- ・そしてまた、バーチャル空間を活用した人と人との接触の、人と人が交わる、バーチャル空間を通じて信頼できる大人と接触をまずして、そしてそこから新たに次のステップに繋がっていくという意味では、バーチャル空間の活用というのは非常に重要だと、今日は浦上教育長の話聞いて思いました。ですので、現実には校内教育支援ルームは作っている。これを充実させていく必要がありますが、あわせて、バーチャル教育支援ルームというようなものも、設置を、横展開して、広げていけばと思います。
- ・ここで人と人との出会いの最初の場になる。そして、信頼できる大人と接触することで、外への活動であったり、また学校に登校するというように繋がってくると思いますので、そういった意味では、バーチャルのこの空間は非常に大切だと思います。
- ・しっかり浦上教育長の意見を踏まえて、バーチャル教育支援ルームというの、充実させていく方法を考えてもらえればと思います。
- ・それから高校ですけれども、ここはやはり義務教育の小・中学校と違って、分布を見ても不登校の生徒が多く在籍する学校というのが32校。これで不登校全体の生徒の約半分以上を占めるということですから、選択と集中が非常に大切になってくるだろうと思います。
- ・なので、不登校の課題が多くある、課題を抱える子どもたちが入学する学校への支援策の強化、これをしていく必要がある。
- ・そして、あわせて、その基幹学校として、学びの多様化学校、いわゆる不登校特例校の高校を、大阪府でも設置したいと思います。設置していきます。
- ・現在、この学びの多様化学校、不登校特例校の高校というのは、全国にあるのですか。

(橋本教育長)

- ・公立ではないです。

(知事)

- ・公立では全国でもないということですが、大阪府において、公立の不登校特例校の設置をしたいと思います。その準備に取りかかってください。
- ・不登校特例校については、先ほど申し上げたとおり、やはり、課題のある学校との連携が非常に大切になると思います。不登校特例校でいろんなノウハウが積み上がってくると同時に、そこで完結させるのではなくて、不登校特例校を中心としながら、課題のある学校に在籍しながらも、そこでいろんな教育を受けられるようにする、柔軟に連携を図れるようにする、その学校で取り組んでいる、今日、田中校長が言ったような居場所カフェを学校の中に作って、居場所づくりをする、いろんな独自の取り組みをしている学校、課題が多い、課題を抱える学校の独自の取り組みを横展開して共有していく。そして、基幹校として府立の不登校特例校がある。不登校の児童生徒をしっかりと支える。そういった仕組みを構築していきたいと思います。
- ・不登校特例校の設置について、準備に取り掛かってもらいたいと思います。
- ・そして、そういったことも含めて、不登校支援のパッケージを大阪府として作って、そして、学校や市町村とも協力しながら、1人でも多くの不登校の児童生徒の支援ができるよう、よろしくお願いします。

(司会・野村企画室長)

- ・ありがとうございました。
- ・教育庁におかれましては、本日の意見交換を踏まえ、今後の不登校支援の取り組みについて、ご対応をお願いします。
- ・以上をもちまして、令和5年度第1回大阪府総合教育会議を閉会します。本会議の議事概要は後日、大阪府ホームページに掲載予定です。
- ・本日は長時間にわたり、ありがとうございました。

以上